

「話すこと」の指導について

——「夕鶴」の鑑賞指導に関連して——

私はさきに「離島における文学教育」と題し、小説単元を取り扱ったときの気づきを述べ、島の生徒が、主としてその環境の制約から良書に親しんでいないことに関連して、自分の力で読んだり書いたりすること、とりわけ、書くこと、自分の気持ちをつづることを嫌う実状を報告したことがある。(注1)

一年、二年、その生徒たちと過ごしているうちに私は、彼らは書くこと同様話すこと、自分の気持ちを手伝に伝えることもまた、あまりじょうずでないことを見いだしている。

友だち同志、気のおけない者同志なら、実に楽しげにしゃべるのに、教室での意見発表はひたすら避けようと努める生徒。我々教師に話さねばならぬ必要に迫られた時でさえ、彼らの中で話がうまいとされるものにその役をおしつけ、各々はできるだけ我々に話しかけることのないよう、また話しかけられることのないようにと工夫しているのである。しかし、我々と話すのが嫌いなわけではないらしく、我々が誰かと話していると集まってきて話は聞いているし、

平野嘉久子

雑談的な会話になると断片的には加わってくるのである。きちんと話さねばならないという考えがあつて尻ごみしているようで、彼らは我々に話しかけようとしないと同じく、上級生、下級生とも話そうとしない。クラス討議・生徒会討議なども弁の立つとされる子にまかせているよりである。各自、自席では結構賛否論をたたかわせてはいるけれども、いざ発表は敬遠ということにしているのである。そして意見発表をする生徒はといえば、おそらくは本人のものとなつてはいないと思われる語句をひんばんに交えて話し、それがまた他の生徒を惹きつける要素となつていたのである。

このように、あらたまった発言を何かむつかしいものと考え、それを尻ごみするといふだけでなく、また彼らの話には相手の意向を無視した話し方が多いということが目につく。敬語の問題を抜きにしても、我々に話してくる生徒の話はあまりに自己本位で、こちらの気持ちを考えていず、しかも本人は毫もそれを意識していないのである。彼ら同志の会話には我々の眉をひそめさせるものが多いのだ

けれど、彼らは何の支障も感じていないかに見える。

ここでも鳥という環境からくる制約は考えなくてはならないし、さらに、彼らが年令的に内攻的な時期にあり、自己を語りたがらない傾向をもつことも注目すべきである。しかしそれを抜きにして、私は彼らの自分のことばが相手に与える効果を無視した話し方が気になるし、自己を人に伝えることに自信を持っていないことが気になるのである。一方でたえず、高校生にいまさら「話し方」の指導なんてという気がするものの、彼らの大半が、鳥外に就職し、すぐさま社会人としての生活を送らねばならないようになってきていること、また、「生活に必要な国語の能力を高め、言語生活の向上を図る」ことが国語科の主要な目標としてかけられていることを思うにつけ、なんとか指導できないだろうかと思えるようになった。しかし、「読むこと」「書くこと」以上に「聞くこと、話すこと」は指導が困難に思われ、それでなくとも、「聞くこと、話すこと」は自然習得の面が多く、しかも相手が高校生とあつては、余計私は手のつけようがないように思う。

教科書にはいわゆる「言語の單元」というのがある。「話す生活」「談話と討議」「物言術」「話しことば」等々。しかしこれは、私にとっては、「聞くこと、話すこと」の直接的な教材とはならなかった。相手の心理や立場をよく知った話し方、自分の思っていることをそのまま相手に伝える話し方、自分の話の相手に与える効果を考え、感情を書さないように努める話し方を一人一人の生徒に身につけさせる教材にはならなかったのである。

この生徒が書くことを嫌がりをするものの、自分の関心を強くひくもの、身近かなものについては、時々すばらしい文を綴ること

のできる生徒であることに注目し、話さずにはおれなくなるような教材はないか、そういう指導はできないものかと考えるようになった。

戯曲が、単に演劇鑑賞の教材にとどまらず言語指導の格好の教材であることは聞いてはいたものの、今まではとりたててそういう角度からは扱っていなかった。昨年十月、一年生に木下順二の「夕鶴」を教えることになってはじめて、これをそういう話し方の指導を含めて実践してみようと思ひ立ったのである。

ここではその授業を報告、つまり、戯曲の学習をとおして、生徒に自分の思っていることを自信をもって話せるように、相手の心理を考えて話すように、少くとも、自分のしゃべることに何らかの意識をもたせるようにと考えて私なりに実践した授業を報告して、今後の「聞くこと話すこと」とりわけ「話すこと」の指導の糸口を見だしたいと思う。

教材はさきに記したように木下順二の「夕鶴」である。これを一年生二クラスで取り扱った。クラスが男女別なので若干のくいちがいはあるが、ほぼ同じ授業をすすめた。目標は指導書を参考に一応次のようなものをかかげた。

イ、戯曲の主題、構成、人物の性格、心理の動きなどを表現に即して読みとることによって脚本をよく理解できるようにする。

ロ、演劇鑑賞の態度を養う。

ハ、民話、昔話などに親しむ。

ニ、グループ学習の態度を身につける。

ホ、話しあい態度を身につける。

、話し方について考える。

右のうち私が重点をおいたのはイとへである。

次に授業経過を記してみたい。

まず第一時は、前単元のまとめのあと20分程度を利用して、下記のような補助プリント(1)をつかって、演劇というものの、戯曲というものについて考えることにした。

参考資料(1)

一年 国語甲 戯曲 夕鶴 (第一時)

○戯曲とは……芝居の筋書、演劇の脚本

文学の形式の一 舞台演技と会話を主とする作品。ドラマ

○出家とその弟子(倉田百三)父帰る(菊地寛)

○文学と演劇(演劇の本質)

文学は、ある作品(作者の魂の結晶)を読むことにより、読者のイマジネーションの働きによって、人物を映像し、人間の真実を探求するものである。演劇は、それを実際の人間によって演じようとするものである。

○学生演劇の目標(演劇の意義・目的)

単なる表面的なじょうずさ(技巧)をねらうよりも、登場人物を具体的につかむ

○総合芸術としての演劇(演劇の要素)

演劇を成立させるもの——調和の精神——具体的には舞台装置、音響、照明、効果などの関連

○演劇の種類

補助プリント(1)

一年国語甲 戯曲 夕鶴 (第二時)

氏名)

○通読して感じたこと

○読みを聞いて…… それぞれの良い点と……と工夫すべき点

つう

与ひよう

運ず

惣ど

子供たち

ここで平均六人単位のグループを作り、以後このグループを中心に授業を進めることを指示した。また次時に全文を通読することを予告、一グループに指名しておいた。

第二時は通読の時間に当てた。前時に指名しておいたグループに読ませ、(期せずして、指名されたグループは配役をして読んだ。)他のものには補助プリント(2)を渡し、これを作成、提出させた。

読後感について……

つうと与ひょうの清い愛情と、それをめぐる金と欲、読んでいるうちに人間のさまざまな欲望が人の心理や人間まで変えていく恐しさを思わずにはいられなかった。ただ思うのは、もしも、運ずや物どが悪意の誘惑をもって与ひょうを変えていかなかったならば、つうと与ひょうは別の世界の人間ではあるが一緒に暮らせたろうにと思う。

読みを聞いて……批評と助言のしかたについて

良 い 点	工夫すべき点	本人の反省
<p>つう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 鶴だと意識していた。 ・ 女房らしくやさしい所を感じた。 ・ 感じは出ていて聞きやすかった。 ・ つうのよわくしさが出ていた。 ・ 声がやさしくつうにふさわしい。 ・ 与ひょうに対するやさしいいたわりの気持ちでよかった。 <p>与ひょう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ かんじが良くでていた。 ・ ことばがはっきりしていた。 ・ 大きい声で男らしかった。 ・ 話す調子になっていた。 ・ 言いまわしはよかった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 強弱をもう少しつけるといい。 ・ いい切りのところをもっとはっきり。 ・ 少し声が低かった。 ・ もう少し感情をこめて読むといい。 ・ ……の所を少しきって読むといい。 ・ もう少し変化をつける。 ・ もう少しゆっくり。 <p>えへへというような所はもう少ししていいに。</p> <p>もう少し表情たっぷりに感じを出して少し早口だったので、もう少し考えながらおちついているとよかったと</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ あがってよく読めなかった。 ・ 一生けん命よんだつもり。 <p>皆の前で読むので、少しは恥ずかしくて自分の思うように読むことができなかった。</p>

・うふんという所がじょうずだった。

運ず

- ・早いけれど感じが出ている。
- ・男の声のようでじょうずだった。
- ・ユーモアをまじえてよかった。
- ・おどろくところがじょうずだった。

物ど

- ・だますときの感じが出ている。
- ・ことばがはつきりしている。
- ・感じがでていた。
- ・速度はちょうどよかった。
- ・おちついている。
- ・方言のいいまわしがよい。

子供たち

- ・子供らしさ。
- ・かわいらしさが出ている。
- ・歌ったところがよかった。
- ・間のおき方がよかった。
- ・子供になった気持ちでやっている。

思う。

- ・恥ずかしかった所がよくなかった。
- ・？の所に気をつけるといい。
- ・もう少しぬけた正直そうな感じが出ればもっとよかったと思う。

- ・ゆっくり感じをこめて。
- ・ことばをはつきり。
- ・、に気をつける。
- ・笑わないで読んだらもっとよい。
- ・長い文になると棒読みになる。
- ・運ずのもっている性格をもう少し出すとよい。

- ・もう少しゆっくり。
- ・もう少し憎らしさがあつたらよいと思う。
- ・……の所の間のおき方を工夫する。
- ・度々、本を読んでいるような感じをうけた。
- ・もう少し変化をつける。
- （さいごになるにつれよくなってはいた）

- ・もっと子供らしさを。
- ・もう少し子供のようにかわいらしく。
- ・もう少し子供っぽく。
- ・もう少し無邪気な感じが出ればなお一そうよかったのではないか。

・あまり早く発音が悪く少し笑ひすぎた。

・感じが出てないと思った。

・私にしてはまあくだったと思う。でもやっぱりあがっていた。

第三時は、各グループで難語句、表現を解決させることに当て
 た。これにさきだつて、前時提出させたプリントを西洋紙一枚にま
 とめ(プリント3)、これを中心に、読後感と批評について考え
 た。

補助プリント(3) 男子

一年 国語甲 戯曲 「夕鶴」 (第三時 男)

氏名)

○感想について

○批評・助言について

良かつた点	工夫すべき点	本人の反省
<p>つう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・感じを出していた。 ・感情をこめていた。 ・セリフに苦心がなされていた。 ・会話的でない。 ・よく気を配って読んでいる。 ・女の声にならうと努力していた。 <p>与ひよう</p> <ul style="list-style-type: none"> ・感じが出ていた。 ・声がよい。 ・感情をこめていた。 ・笑うところがよかつた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・笑わなければもっとよくなる。 ・「ね」というような言葉をいうときは、もう少しさげるとよい。 ・単純なところがあつた。 ・語尾の上下がまちまちのため、意味がちがうような感じがした。 	<ul style="list-style-type: none"> ・つうになり他のものとは違って女のよう に話さなければならぬので大変苦勞し た。……中略……終わりになるにつれ長い ところがあつてどこで切るか心配でならな がつた。 ・与ひようの心の動きにつれて読むべきだ つた。 ・読む練習が不足。 ・もう少し感情をこめて読むべきだつた。 ・与ひようの性格をつかんで読まなければ

- ・まちがわずによんだ。
- ・つうに対する愛情をよく出していた。

運ず

- ・一生けん命読んでいた。
- ・人の良い感じがよくでていた。
- ・気のよわいような所は出ていた。
- ・ゆっくり読んでいた点がよい。
- ・小心のような気持ちをあらわしていた

惣と

- ・声が惣どにはもってこいである。
- ・感じが出ていた。？のところなどよくよかった。
- ・商売人らしさが出ていた。
- ・ことばになれている。
- ・悪やくぶりをはつきしていた。
- ・金に対する欲が出ていた。
- ・よく練習しているように思われた。
- ・田舎なまりのことばを出す時よく感じが出ていた。

ト書

- ・すらすらのどから出して読んでいてよかった。もつと落ちついて明確に読むべきだった。

- ・あほうらしく言葉を使ったらよかった。
- ・長いところは少し早かった。

- ・もう少し感じを出して読むといい。
- ・もつと元気を出してやったらよかった。
- ・声を大きくして読んでもらいたかった。
- ・もつと悪者らしくやったらいい。
- ・言葉になれていないようだった。

- ・もつと惣どになりきるといい。
- ・もう少し欲をもった言いかたの方がいいようだ。
- ・力強いセリフの所は強く、弱い所は弱くして読んでいたらもつとよかったと思う。
- ・田舎の男のアクセントが感じられない。
- ・すらすら読んで感じが出ていなかった。

- ・もつ少しゆっくりよんだらいい。

ならなかった。(与ひよりのばあいは愚か者のような読み方)

・読み方をもつとく勉強しなくてはならない。

・準備がよくできてないためうまくいかない。
・経験があまりないので恥ずかしさがのこる。
・読むのが下手で申し訳ない。

とくに批評の仕方について、相手を傷つけない批評、相手に受け入れられる批評について考えようとした。たとえば、「元気が少々たりなかった」という批評より「もっと元気を出してやったらよかった」の方が親切な忠告ではないだろうか。言うところは同じにしても、さまざまな言い方があるということを考えさせようとしたのである。私としては、他人の批評というものは案外口にしがちでも無関心におこなわれるものであり、次時からの話し合いの上にも相手を考えての発言ということが大切になるので、ここで一応相手を傷つけない発言ということについて生徒に考えさせておきたいと思ったのである。また、生徒の批評が思いがけず、戯曲中の各登場人物の性格把握に結びついていることから、目標の1にもふれることができた。

さて、各グループの話しあいのはじめでのごとく、珍らしさも手伝って比較的スムーズに運んだように思われる。ここで、各グループのリーダーに参考資料2の様式のレポートを提出させることにした。

参考資料2 (レポートの形式)

レポートⅠ・Ⅱ・Ⅲ—西洋紙 $\frac{1}{2}$

- グループ名
- グループメンバー
- 本時の目標
- 進め方
- 内容
- 反省

レポートⅣ・Ⅴ—西洋紙 $\frac{1}{2}$

- グループ名
- グループメンバー
- 内容
- 反省

個人メモ—西洋紙 $\frac{1}{4}$

氏名 ()

なお、全員には補助プリント(4)を渡し、本单元終了時に提出させることにした。

補助プリント(4)

一年 国語甲 「夕鶴」(第三時)

氏名 ()

- この劇の主題、構成を考えよう。
- 人物の性格、心理のうごきをしらべよう。

第四時は研究の手引きを考えることにあてた。時間の都合でグループ別に分担して検討させることにした。同一の問題を二グループに担当させ、それぞれに討議させ、前時同様リーダーにレポートを提出させることにした。なお、次時には全員でこれを考えることにし、その際にはリーダーは発言できないことを予告し、全員がグループの質問に答えようよう各グループで話しあつておくことを要求した。

第五時には、前時各グループから出されたレポートを補助プリント(5)のようにまとめ、これを中心に全員で討議することにした。

補助プリント(5)

戯曲 「夕鶴」 (第四・五時)

○研究の手引きをまとめよう。

子供とつうの世界は同じ。純粹な心を持つているつうは無邪気な心を持つ子供とは気が合う。

子供とつうの世界は共に同じような世界である。世間のみにくさや、哀れな生活、むざんな殺人をしらずに、ただ自分の幸福、楽しさだけを思い、実行しようとしている。損得を知らない。二四八ページのつうと子供の会話 二四〇ページ子供がつうをしたところ

3、運ずと物とは普通の人間生活の生活環境に住んでいる。しかしその生活には、欲に満ちた、そして、自分一人が良ければ他人はかまわないというような環境、少し貧しいためにこういうこともするのであろう。人間で一番みにくい、いや本当の世界に住んでいる。

運ず……

少しは欲はあるが人から突っこまれたりなどするとおじけたりするような気の弱い性格。

損得を中心に考え生きているが、一面、おくびようなところのある人。

二四五下7、二四六上、二四七、二五九、二六四

物ど……

欲の皮のつっぱった、だれが何といおうと自分に利益であれば、他の人には迷惑も考えないで、ほんとうにこう欲である。

もっとも損得に気をつけ、情を持たない男として書かれている。

二四七下6 二五九上8 二六四下1 二四三

彼らの世界はつうや子供の世界と対比される。つうや子供の純粹な世界と彼らの欲にみちた世界はまる反対。

彼らのことばつかいは欲に目をむけているようで、つうのことばつかいには、金も欲も知らない清い純粹なことばがあらわされる。何か神秘的なものが漂っている。

5、与ひようが機を織るところのぞいたから。(つうが機を織つてるところをのぞいたら、自分たちの間はおしまいといつていた。)つうは与ひようからうらぎられた気持ちもあるうし、つうの世界と与ひようの世界が別になっていっしょに暮らせなくなったからでもあるう。

6、結局普通の人間にすぎなかった。与ひようは少しぬけているが、善良であり、純真である。運ず、物どにだまされ、物欲のとりになるが、もとくはつうと通ずる性質。

つうとの交渉は純真、清らかなものの触れ合い結びつきを意味している。

4 (1)・つうの知らない悪とか欲とかはかきを求める醜悪な世界。

・いたわりのあるやさしい人、清らかなつうをこの上もなく慕

っていた。

(2) 二五ページ上段九行目

(3) ……

(4) 前
後

(5) (6) (7)

前時予告したとおり発表はリーダーを除いたものでなされたのであるが、互いに補いあって他グループの質問に応ずる光景が見られた。

第六時には、前時までで内容は一応把握されたものと見なし、各グループで、どう読んだらいいかを考えさせることにした。

第二時の批評の際気づいたように各人物の性格、心理の動きなどの確に把握することが、すぐれた読みの前提であることを確かめておいた。なお、次時から、グループ別に発表させることを予告した。

第七、八時は、各グループ別の読みの発表にあてた。発表したグループには反省を、聞く側のグループは感想、批評をそれぞれまとめ報告させた。この際個人用のメモカードも同時に回収することにした。なお第八時終了後第三時に配布した補助プリント(4)を提出させた。

第九時はまとめと反省にあてた。前半は前時提出させた生徒のプ

リントをまとめた補助プリント(6)を中心に話しあいをすすめた。

補助プリント(6)

一年 国語甲「夕鶴」

〇構成

序章 平和な明け暮れ

1 与ひょうと子供たち 240初—242下1

2 つうの登場 242上—243下1—1

展開 惣ど・運ずの策動

1 兩人、布の正体を確かめに現われる 243上—244下1—10

2 兩人とつうの出会い 244下1—245上1—18

3 与ひょうのだきこみ 245下1—247上1—17

4 つうの不安 247下1—248上1—18

5 与ひょうの屈服 250上1—251上1—11

破局の前提 与ひょうの強要とつうの譲歩

1 与ひょうの強要 251上1—257上1—9

2 つうの譲歩と禁忌の念押し 257上1—258下1—15

クライマックス 与ひょうが禁忌のいさめを破る

1 惣ど・運ずの喜びと正体の確認 258下1—259下1—14

2 与ひょうの破戒 259下1—260上1—15

3 与ひょうの絶望 260上1—261上1—14

破局 織り上げた布を形身につうは空に帰る。

1 つうの悲しみ

261上五—263下四

2 別離

263下五—終わりまで

○主題

○民話 1 民話劇

愛と誠で結ばれた人間と超人間とが、人間界の俗悪に超越して生活しはじめて、やがてそれが、しだいにくずれ去っていく姿を描いたもの。純粹清浄なものがついに郷愁としての姿しかとどめないところの人間界の悲しみについて述べている。

日本の農民女性の幸福への意志と戦いを、幻想的世界の中に美しく打ち出したものと言える。

○純粹性の象徴としてのつう。清純を失ったものの清純への郷愁。

- ・人間の欲望と、清浄無垢の世界の対立。
- ・愛情の清らかさと、はかなさ。
- ・現代物質文明への抗議をもった寓話。
- ・女の運命、嫁の立場。
- ・女性の幸福への意志。

後半は総反省ということで、参考資料3を配布、これに記入、提出ということにした。

以上が授業のあらましである。次にこの授業をすすめながらの、また今こうしてふりかえってみるときの気づき、反省を述べてみたい。

まず第一にいえることは教材のよさということである。この学年で私がこれまで書かせたり、発表させたりしたうちでは、この授業が一番活発だったといえる。授業形態の影響も無視できないものであるが、この「夕鶴」の生徒へ訴える力の大きさがなにより第一だと考えるのである。生徒の問題意識をよびます教材を与えれば、書く時間同様屈託なく話すということが言えると思う。

次に感ずることは、やはり一人一人に責任をもたせると生徒は真剣になる、というわかりきったことである。話しあいもリーダーに発表をさせないとなるといやでも全員が参加することになり、また他グループとの比較から、とりわけ女子の場合グループ員の協力が生かされたように思われる。批評の仕方の注意がきいたのか、グループ内での話しあいも、気を悪くする子がいないようにとの心くばりが感じられた。

生徒はグループ学習ということに関心をもち、また私の主眼点があるところでも感じたらしく私としては意識せずには話しあいをすすめうる状況にあったのである。

この授業が生徒にどううけとられたかを知る一つの資料に、第九時の総反省と年度末のアンケートがある。

参考資料3 (学年末アンケートの様式) 西洋紙一枚

一年間をふりかえって

氏名()

一 この一年間で一番印象にのこっていること

1 学校生活全般 2 家庭生活全般 3 国語の授業

二 この一年間の国語の授業をふりかえって

- 1 その第一印象
- 2 一番印象にのこっている授業 その単元名（
その理由）
- 3 一番面白くすぐせた授業
- 4 一番面白くなかった授業
- 5 一番役にたったと思う授業
- 三 この一年間の国語の授業によって、各々の言語生活を反省させられたことはないか。
- 四 国語の授業により何を得たと思うか。
- 五 一年の反省と二年への抱負。
- 六 国語の授業に何をのぞむ。
- 七 国語という科目に対する好悪・関心。

アンケートでは、二の2、3、4、5の中で4を除いた他には「夕鶴」があげられた。私としては、4に夕鶴があげられていないということは意外であった。概してこういう授業には成績のいい生徒がソッポをむく傾向が見られるので、二、三人はこの4に「夕鶴」をあげると考えていたのである。しかしこれは総反省で生徒が記していること（参考資料4）からもわかるように、そういう生徒はたまたまレポート作成、司会という役をやっていたので、反撥ばかりもしておれなかったのである。

参考資料4、内容の例

- 1
○先生から問われた時「こうじゃなかなあ」と思ってもいえませんでした。グループに分けたら、どうしてか思っていることをいえることができましたからとてもよかったです。
○いつもだと少しくらいわからない所があっても自分から進んで聞く気もせず、そのまましておくことがたびたびあったが、今度は、自分が自信ない答でもグループだからあまりはずかしくもなく発表できたし、皆からもいろいろ注意してもらって大へん勉強になった。
○一まとまりになって互いに自分の意見とか不満な点とかをみんなまで話し合えたのがよかった。こんな場合、もしもグループでやらずに普通の授業でやったら、全体の前で発表することの嫌いな人は、そのまま自信がないままに終わっただろうと思う。そんな点から見てもよかったと思う。
○グループ内の人に迷惑がかかるといけないので僕としてはさわぐことができなかった。
○グループごとに勉強してそれを発表し他のグループの批評をしてみたい、お互い勉強するのはよかった。
○私は性格としてこういう時は積極的にならないのですが、今度はリーダーになったものだからいやでも積極的に参加しなければならなかった。でも私はこんなことを経験して非常に役立ったと思う。
○やらなければならぬからやったんだというほうがほんとうだろう。しかし、自分達のグループの結果を毎時間先生のもとに提出し、それを批判してもらうことはうれしかった。
- 2

以上のことから「話すことの指導」について私の得たものは、次のようなごくわかりきった諸点である。

1 よい教材——生徒の心に訴える教材——を求める。

2 生徒に楽に話せる場を与える。

3 生徒に話すものをもたせる。——自信をもって話せるものを持たせるといふことはなにより大切である。

4 生徒一人一人に責任を持たせる。

5 「話すこと」の指導におおくうがらないで、真剣に取り組んでみる。——高校生にいまさら「話すこと」の指導など、とついで安易に考えるのは間違っているのではないか。高校生なりに指導すべきものがあるのではないか。

最後に、このようにつたないものをまとめることになって恥ずかしく思うことは、この授業がいつのまにかこういう授業形態になつたということである。はじめは、ただ、戯曲だからできるだけのいゝと話しあわせる機会を持ち、その時々話すということについて何らかの指導を試みたいという程度のものであったのであるが、なんとなくグループ学習になり、討議をし、さらにレポートなどというものにまでなり、しかもそれがはつきりした心づもりなしに、授業をすすめているうちに次々と生まれたのである。もちろん私の心の底には常に指導目標のイとへはあったとはいえる。しかし、今考えてみると、その時は次の時間はどうしよう、次の時間はという毎日ではなほだしい時は教室にはいつてから、こうしてみようというのでやったこともあって、一貫した授業のはこびというものは立ってはず、いきあたりばったりの感さえるのである。はじめ六時間程度配当していたのが九時間にもなつてしまつたことも綿密

な計画がたつていなかったことによると反省している。戯曲教材を効果的に使つて話すことの指導を考えようとしておりながら、綿密な計画を立てえなかつた自分の未熟さを恥ずかしく思うと同時に、今後は、どうにかなるだろうという気持ちをおさえて、一単元の指導計画を立てていきたいと思う。

注1 「国語教育研究」第二号 広島大学教育学部光葉会発行

(元、長崎県北松浦高等学校教諭)

(現、山口県下関東高等学校教諭)